

書評

城内康伸著『奪還 日本人難民6万人を救った男』

久保田 るり子（産経新聞客員編集委員）

終戦によって、朝鮮半島には約70万人もの日本人が、引き揚げ者として残された。本書は、このうちの北朝鮮側に封じこめられてしまった人々を命がけで救おうと、縦横無尽に働き、とてつもない困難に挑んで、6万人の人々を北朝鮮から脱出させた松村義士男という男の物語である。

彼の存在は、日本の敗戦、南北分断、冷戦の最前線となった朝鮮半島の歴史の間で、木の葉のように吹き飛ばされ、痕跡さえも消えかけていた。その人物の痕跡を丹念に調べ上げ、冷静な筆致で描き出したのがジャーナリスト、城内康伸氏である。

描かれているのは救出劇だけではない。生々しい分断の現実、飢餓や病苦の実態、在留した日本人たちの舐めた辛酸、ソ連に蹂躪された北朝鮮の姿などの実相である。数々の証言や発掘資料に基づいて描かれた時代の風景が、人々の言葉や行動にずっしりとした重みを与えている。優れたノンフィクションとして、本書が高い評価を受けている理由であらう。

大日本帝国の崩壊と朝鮮半島の分断

敗戦は一夜にして朝鮮半島の支配者を変えた。1945年8月初旬、ソ連軍は満州から陸路で、海路では清津から北朝鮮入りし、平壤には24日に入城した。これに対し、米軍は9月初旬、京城（現ソウル）の近郊、仁川に上陸した。38度線で米ソによる分断統治が決まった朝鮮半島の南側（韓国側）には日本人が約45万人、北側（北朝鮮側）には約25万人が居住していた。だが、分断は人々の運命を、文字通り「天と地」のごとく切り裂いた。

ソ連は、1945年2月のヤルタ会談での密約を待つまでもなく、この戦争における南下政策を企図していた。8月6日、米国による広島原爆投下を見届けたソ連は8日、対日参戦を宣言するや北朝鮮北東部に激しい空爆を開始し、25日までに半島の南北間を往来していた鉄道を38度線で止め、南北交流を遮断した。そして、北朝鮮の日本人が南に移動することを許さず、残留日本人を北朝鮮に封じ込めてしまった。

米国は、9月8日に京城近郊の仁川に上陸した。ただちに米軍政庁を発足させて軍政を敷き、10月には残留日本人の送還開始を発表した。韓国側にいた日本人は、1946年春までにほとんどが引き揚げた。

日本人の朝鮮半島からの引き揚げといえば、南側から風景が一般的だ。このとき日本人たちは、ほとんどの現金、資産などの財産を持ち出すことを禁じられて、身ひとつで帰国した。米軍はこの日本資産、公的なもの私的なものすべてを接収した。米側はこれを「帰属財産」と呼び、1948年、大韓民国建国で発足した李承晩政権に譲渡した。その額は朝鮮総督府予算の15年分に及んだ。約700億円、現在の価格にすると10兆円にのぼるとされる。帰属財産の多くは韓国の民間に払い下げとなり、3年後の大韓民国建国の資産と

なった。北側からの引き揚げが正式に始まったのは1946年12月である。北側の日本資産は、ソ連軍と北朝鮮によって略奪、収奪されたのである。

南側に残された日本人はそれでも幸いだった。総督府は解放に喜ぶ朝鮮人への刺激を恐れて、行政権をあたふたと独立運動家らに依頼するなど及び腰で対応したものの、南側には帝国陸軍23万人が駐屯していたため、米軍政に移行するまでの期間の治安は、概ね保たれたからだ。だが、ソ連が侵攻した38度線以北、北朝鮮側はまさに無政府状態となった。

北東部への8月9日未明のソ連軍の侵攻に始まり、13日には港町、清津へ艦砲射撃と上陸作戦が始まった。突然のソ連侵攻に、北東部の日本人は数万人もの人々が家も土地も捨て、逃避行を始めた。徒歩で逃げた者、貨物列車に乗ったもの、無蓋貨車に乗ったもの、人々は鍋釜を抱えて数千万人の行列をなして歩きはじめたという。

北東部、咸鏡南道の道都、咸興の駅前には8月16日、日本人避難民であふれかえった。人びとの頭は泥でまみれ、顔は煤けて、ボロボロの衣服をまとい、「大日本帝国の崩壊、それから植民地の崩壊を象徴する光景だった」という。人びとは安全な場所を求め、流浪した。各地の学校や駐在所、屋根のある建物はみな、避難民の奪い合いになった。一行が去ったあとは汚物だらけになった。赤子の泣き声がソ連軍に聞こえることを恐れ、避難民の歩き続ける山中には、まだ乳児の赤子が何人も置き去りにされたという。流浪する日本人の多くは、8月15日の玉音放送を知らなかった。

ソ連軍が侵攻した北朝鮮は、略奪と暴行が横行した。ソ連軍には囚人兵も多く、恰好の餌食となったのが残留日本人だった。ソ連軍は日本人、朝鮮人の区別なく襲った。北朝鮮には12万人の日本軍がいたが、軍人のみならず、総督府の官吏や警察官までシベリアに連行された。軍政を敷いた南側の米国とは異なり、ソ連は朝鮮人による人民委員会を行政の主体とした間接統治をおこない、ソ連軍は北朝鮮建国の1948年9月まで駐屯した。

人びとは安全な場所を求め、歩き続けた。収容先は人々であふれかえり、1畳に数人から10人もが居住した。それでも屋根のある場所が確保できれば上等だった。食糧がなくなり、飢えと寒さが襲う。日本人の収容先に餓死した親子の死体が放置され、寒さと栄養失調で発疹チフスや赤痢が流行した。ナチス・ドイツのユダヤ人強制収容所と同じ病である。咸興に殺到した避難民は9月下旬までに2万5000人を超えたが、感染症や栄養失調による死者は8月328人、9月777人、10月1009人、11月1070人とウナギ上りに増えた。厚生労働省引き揚げ援護局の資料によると、飢えや病による北朝鮮での残留日本人の死者は2万6000人とされる。

38度線以北で取り残された日本人の惨状を、城内氏は「棄民」と呼んだ。主権を奪われた国家は、国民を守るすべなく置き去りにした。海外に取り残された日本人は、総計で約330万人とされる。城内氏は、引き揚げに関する日本政府の終戦処理会議の極秘文書を手入、本書で紹介しているが、この文書には「出来る限り現地に於いて、共存神話の実を挙ぐるべく、忍苦努力するを以て第一義たらしむものとし…」と書かれている。要するに、帰国させる余裕はないので、現地で何とかしてくれということだ。

もちろん、日本政府が何もしなかったわけではない。北朝鮮の残留日本人を救出すべく、在モスクワ大使館、万国赤十字社などを通じソ連との交渉を試みるが、敗戦国日本は全く相手にされなかったのである。

「このままでは日本人は死に絶えてしまう」

劣悪な環境に、死者は増え続けていた。咸興での避難民の惨状に「このままでは日本人は死に絶えてしまう」と救出運動に立ち上がり、やがて残留日本人の陸路や海路での北朝鮮脱出行を数百人単位で実現し、ソ連側とも朝鮮側とも交渉しながら日本人救出を直接的、間接的に実現するリーダーとなったのが、その後「引き揚げの神様」と呼ばれた男、松村義士男である。松村は当時、34歳の民間人であった。

松村は戦前、左翼運動に参加して複数の逮捕歴があり、思想警察である特別高等警察(特高)の監視対象だった人物である。しかし、日本共産党などの組織に属さないアウトサイダーでもあった。

松村は終戦を北朝鮮北東部、清津の近郊の都市、羅南で迎えた。松村は1945年5月に召集され羅南の工兵補充隊の2等兵だった。ソ連軍に連行され、捕虜収容所に入れられたが移動中に脱走、かつて住んでいた咸興に逃げ帰った。ところが松村は、咸興でほどなくソ連軍司令部の囑託として職を得ている。北朝鮮で松村は、ソ連軍にも朝鮮側にも顔が利いた。残留日本人の救出運動では人を動かす力も持ち、自身は何度も38度線を単独で往来している。そんな松村の来歴を城内氏は克明に調べて追っているが、それでもなお、もはや解明不能の部分もある。たとえば、進駐まもないソ連軍からの脱走者が、なぜソ連軍司令部の職を得るほど食い込めたのか、などである。しかし、こうしたエピソードがかえって松村という男の人物像に膨らみを与えていて興味深い。

明治44年(1911年)生まれ、熊本県出身の松村は、父親が北朝鮮北東部の元山で製材所を営んでいた。このため尋常小学校を卒業後、元山に移り住んだ。元山中学時代には「左翼運動のガリ版刷りを手伝った」ことが問題視されて中退、日本窒素の興南工場(興南は咸興市内の区域名)に就職したが、ここでも労働運動に加わった。

日本統治下の北朝鮮では、北東部の工場は劣悪な環境に置かれていた。松村のいた興南工場は1930年代、ストライキが頻繁に発生、そのなかには共産主義インターナショナルの指令を受けた指導者も入り込んでおり、1932年、治安維持法違反で400人もの大量検挙となる「太平洋労働組合事件」が起きた。当時20歳だった松村も、組合運動に加担していたとして逮捕されたのだった。

松村はその後、日本に戻ったが、大阪に行き、労働運動の拠点でもあった大阪労働学校で学んでいる。仲間内では活動家として知られるようになり、特高の監視対象となった。活動家仲間から北九州に労働者の新組織作りと共産党再建に加わる依頼を受けて動き、昭和12年(1937年)治安維持法違反でまた逮捕された。十代からこうした運動とかかわった松村だが、日本共産党には入党記録がない。

少年時代、青年時代から労働者や弱者を救うため活動した。労働運動の中枢にも身を置いた。運動には共感し、あるいは率先して行動するが、組織には属さず、共産党員にはならなかった。こうした松村の在り方を、城内氏は「教条主義を排し、組織に縛られることなく目的達成のためだけに行動する。そうした松村のプラグマチックな性格が反映されているように思う」として、松村を「異端の人」と呼んでいる。

30代となって咸興に舞い戻っていた松村は、終戦直後、北東部から南下してくる日本人避難民の惨状に直面する。咸興では、蔓延した発疹チフスや栄養失調の死者が急増し、

火葬の薪もままならず深い穴に遺体を収容するしかなかった。松村はかつて興南工場時代の労働運動の同志、磯村を探し出して組織的な日本人救出に乗り出した。

あたかも共産党組織のような「朝鮮共産党咸興市党部日本人部」なる名前の看板を掲げた事務所を作り、ソ連軍側や朝鮮側に働きかけて救出活動を本格的に開始した。朝鮮側に顔が利く松村は、「朝鮮労働党咸興市党部日本人部」の名称を使って救済活動をやりやすくすることについて、事前に朝鮮側の了承を取り付けていたようだ。この「日本人部」は機関紙も発行したというから、松村の組織構築の腕は相当なものだった。労働運動で培った人を動かす能力を発揮した。

1945年暮れ、避難民の辛酸はピークに達した。咸興の南の寒村、富坪には、北東部からの日本人避難民約3200人が移送された。食糧不足で骨と皮になり、弱り切った人々は、荒れ放題の兵舎に放り込まれたが、窓ガラスは落ち、暖房も電気もない。その有様は「白昼でも凄惨の気に満ちた暗黒の病窟」であったという。翌年2月までの死者は、1000人を超えた。

松村は、残留日本人を集団脱出させるべく単独行で38度線を越えて、京城（ソウル）の日本人世話会の協力を得ると決断。朝鮮側の人脈を使って越境に成功、京城の日本人会から資金も得て北に戻る。そのうえで具体的な集団脱出構想を練り上げた。

ついに1946年3月、鉄道での残留日本人の試験的な南下が始まった。約半月で1500人の脱出を成功させた。4月には約8000人、5月には病人やけが人を乗せた「病院列車」も走らせた。このペースでいけば、夏以前に相当数の日本人集団脱出が成功するはずだった。しかしこの脱出は、ソ連や朝鮮当局が許可した正式な引き揚げではなかった。あくまでも隠密な南下計画だった。

米軍政庁が出した日本人移動の禁止

不測の事態は5月下旬、韓国側から起きた。米軍が北朝鮮からの日本人の越境を禁じる措置をとったのだ。韓国側で5月半ばからコレラが蔓延し始めた。米軍は北朝鮮からの不衛生な残留日本人の大量南下で、コレラ蔓延をさらに広げることが懸念した。日本人移動禁止をソ連側に要求、ソ連軍司令部が受け入れ、北朝鮮側では日本人は移動禁止対象となった。

6月下旬になると、コレラは北朝鮮側にも発生、拡大した。松村はこの間、何度も38度線を突破しての京城入りを試みては失敗、逮捕されている。山中を徒歩で走破する38度線越えは、ソ連軍の監視下にあるため、見つければ銃殺の危険もあった。しかし、松村は危険を顧みずに南側の日本人会に北側の惨状を伝え、何とか救済しようとした。

松村らは、ソ連軍や朝鮮側への工作活動を続けた。ようやく奏功したのは9月中旬だった。大量救出の再開第一陣は、咸興から約2000人が鉄道と海路を使って北朝鮮を脱出した。続いて近郊の興南、元山からも漁船などを使って脱出を続けた。咸鏡南道咸興での松村らの奮闘は、北朝鮮全土の日本人社会に広まった。松村は6月以降、北部の咸鏡北道での活動も開始した。咸鏡北道の地元を訪れると、松村は「引き揚げの神様」と大歓迎されたという。

すでに季節は晩秋となっていた。1946年10月、ソ連はようやく在留日本人の北朝鮮からの正式引き揚げを決定した。松村ら民間人による残留日本人の集団脱出・救出は、よ

うやく役目を終えることになる。本格的な活動は約9カ月間であった。

ソ連が北朝鮮の日本人引き揚げ事業を開始したのは、1946年12月であった。このとき、北朝鮮に残っていた日本人は約8000人にすぎなかった。ソ連軍司令部の担当者は、「20万人の日本人はどこに行ったのか」と唖然としたという。松村が直接、間接的に脱出させた在留日本人は6万人に及んだ。

仁王立ちで人々を救った日本人の記録

松村義士男が北朝鮮からの日本人引き揚げに大きな役割を果たしたことは、引き揚げ史研究や終戦における朝鮮半島史、あるいは引き揚げ当事者の手記などにより、研究者の間では知られてきたという。しかし、城内氏による本書は、過酷な日本の敗戦の混乱時にあって、身を賭し、仁王立ちになって、日本人を救おうとした松村義士男の実像に迫ったノンフィクション作品として、静かな感動を広げている。難民の救済といえば、第二次世界大戦時、約6000人のユダヤ難民に「命のビザ」を発行した外交官、杉原千畝が有名だが、松村義士男は同じ日本人として、まさに全身全霊で敗戦の惨禍に苦しむ日本人たちを救おうとした男として記憶されるだろう。

著者の城内康伸氏は、中日新聞社（東京新聞）の朝鮮半島報道で知られてきた気鋭のジャーナリストである。2023年末に新聞社を退社、現在はジャーナリストとして活動を始めたばかりだ。朝鮮半島のスペシャリストとしての活動は25年に及び、韓国ソウル駐在、中国北京駐在の海外特派員生活も14年間務めた。特に北朝鮮報道では、他に追従を許さないスクープ記事を何本も書いている強者記者だ。

その成果は新聞に収まりきらず、約1400件の機密文書や内部資料をあつめて執筆した『金正恩の機密ファイル』（小学館新書、2020年）を出している。また、北朝鮮が南侵した悲劇的な戦争「朝鮮戦争」で米国の要請により朝鮮水域に出動した、旧日本海軍軍人らによる掃海部隊「日本特別掃海隊」の実像を描いた『昭和二十五年 最後の戦死者』（小学館2013年）などの労作もある。

城内氏によると、松村義士男の存在を初めて知ったのは約10年前で、新聞連載の「終戦と朝鮮半島在留邦人の軌跡」がきっかけだったという。資料の書籍に在留邦人の引き揚げを助けた民間人として松村らに関する記述があり、北京勤務を終えた2021年から本格的に取材を開始して、約3年をかけて調べ上げたという。さらに、この本は出版社の意向で「松村義士男の日本人脱出工作に絞る」ため、元原稿の約3分の1を削ったのだという。実にもったいない話だ。城内氏には「たくさん重版したあと、削ってしまった3分の1を復活させた増補版を是非、出してください」とお願いしてある。

（新潮社、2024年刊）